

# 八重山諸島の考古学

## 2. 編年研究

編年研究については、発掘事例が多い八重山諸島を中心になされてきました。しかし、近年、宮古諸島でも先史文化を含んだ独自の編年が提唱されつつあります（砂辺2007）。

先島諸島における編年研究は、多和田真淳が1956年に発表した「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」（多和田1956）に始まります。この編年は、奄美・沖縄諸島及び先島諸島をも含んだ編年であり、「あま美大島・沖縄本島・先島」を三段で構成していました。この編年は、「下田原・仲間第二」を「仲間第一・西表大原」よりも古く位置づけているのが特徴でした。

しかし、1960年に早稲田編年が提唱されました（図2）。『沖縄八重山』の報告では西村正衛が「総合的所見」（西村1960）、滝口宏が「結語」（滝口1960）で個別に編年を紹介していますが、いわゆる「早稲田編年」と言われるのは、滝口が提唱したものです。早稲田編年では、先述の通り、無土器の文化層を下田原式土器が出土する文化層より古く位置づけました。早稲田編年では時代を四時期に分けており、第一期を仲間第一貝塚に見られるような無土器、第二期を下田原貝塚などの土器のある時代、第三期をフルスト原遺跡などの外耳土器が出土する時代、第四期は近世の村跡など、パナリ焼としています。この編年は提唱から20年以上も八重山諸島の代表的な編年として、様々な研究者に強く影響を与えました。

編年	遺跡名	遺物
第一期	仲間第一（西表）	石器（磨製・半磨製）
第二期	下田原（波照間）	土器（小量）・石器 貝器・骨角器
	仲間第二（西表）	
	大原川付近小貝塚（西表）	
第三期	山平西（西表）	土器（外耳多量・磁器 その他） 鉄製品・石器・貝器・ 骨角器
	フルロウ山（小浜）	
	フルスト原（石垣）	
	波照間貝塚群	
第四期	大原（西表）	土器（ハナレ系？・磁器 その他）鉄製品
	野底（＃）	
	川平第一（石垣）	
	川平第二（＃）	
	川平第三（＃）	
	名蔵川（＃）	
	黒島	

— 線は各遺跡に共通するもの

図2 早稲田編年

例えば、リチャード・ピアソンは「*The Sequence in the Sakishima Islands*」の中で編年を発表し（Pearson1969）、大きく4期（“No pottery;無土器” “Shimotabaru Type;下田原式” “Panari Functional Type;パナリ機能タイプ” “Panari Burial Type;パナリ埋葬タイプ”）に分けています。國分直一は、『南島先史時代の研究』（國分1972）の中で、早稲田編年を基礎とした編年を提示し、文化期をやはり4つのステージに分けました。三島格も「南部群編年表」（三島1974）で、前・中・後・晩期の四期に区分しています。当時、沖縄県教育委員会で調査を担当していた當眞嗣一は、早稲田編年を基本にしながらも、原始社会～古代社会へという時代区をし（當眞1976）、第一期の終末を9世紀頃、第二期の終末を12世紀頃というように、おおよその年代観を編年に組み込んでいます。

このように、早稲田編年は多くの研究者に影響を与えてきました。しかし、前述の大田原遺跡・神田貝塚、下田原貝塚・大泊浜貝塚の発掘調査によって、逆転することになります。その後、発掘調査成果を踏まえ、上原静が「いわゆる南島出土の貝製利器について」という論文の中で、下田原式土器が出土する遺跡を無土器文化よりも古く位置づけた「編年（中・南・九州の対応）」を発表し（上原1981）、高宮廣衛が「編年試案の一部修正について」という論文の中で、「付記

2」としてⅠ期に無土器・局部磨製石斧、Ⅱ期に下田原式土器、Ⅲ期に中森式土器、Ⅳ期にパナリ焼を記載した八重山諸島の編年試案を発表しました（高宮1981）。その後、高宮は1991（平成3）年にも「八重山地方の考古編年」を発表していますが（高宮1991, 1992）、先の編年とは体裁が異なり、時代を「先史時代」と「歴（原）史時代」の2つに分け、先史時代は有土器と無土器、そして歴（原）史時代を前期と後期と区分しています。高宮は有土器から無土器へという変遷について、これまで発表された説を、①有土器→無土器→有土器の変遷を是認する説、②無土器時代は存在しないとする説、③土器を持つ文化と持たない文化が共存したとする説、④共存ではなく入れ替わるとする説の4つに整理しました。それを踏まえた上で、自らの編年試案については台湾の先史時代の状況を例に挙げ、「二（多）元説も軽視できないのでは」と述べています。編年の中で、有土器と無土器が並列関係で示されているのは、そのような考えが反映されているのでしょう。なお、高宮は自らの編年を4回修正しています（高宮1994, 1996, 2000）。

八重山諸島で長く研究を続けてきた大瀨永亘は、「八重山の先史時代を考える」という論文の中で、編年を発表しました（大瀨1985）。時期を先土器時代、赤色土器文化、無土器文化、スク（グスク）時代、琉球王国時代に区分しており、早稲田編年の第一期と第二期が逆転して位置づけられています。赤色土器文化というのは、下田原式期と同時期の文化を指します。大瀨は、さらに情報を追加した形で、『八重山の考古学』の中でも編年を発表し（大瀨1999）、時期区分は「先土器時代」を除くと、大きく三区分（赤色土器時代、無土器時代、スク時代）としています。

先島諸島の編年研究で大きな問題とされるのは、下田原式土器の文化と、無土器の文化との関係です。現在のところ、文化一元論と文化二（多）元論の、大きく2つの考え方があります。高宮廣衛は、これらの諸説を次のように整理しました（高宮1992）。

- i) 有土器→無土器→有土器の変遷を是認する説。
- ii) 無土器時代は存在しないとする説。
- iii) 土器を持つ文化と持たない文化が共存したとする説。
- iv) 共存ではなく入れ替わるとする説。

これらを先述の文化論に分けると、i) と ii) は文化一元論、iii) と iv) は文化二（多）元論にあたります。発掘調査が進む中で、無土器文化の存在は容認される傾向にあります。この両文化期に隔たりがあるかどうか、という点においては、同地域の研究者を二分します。それぞれの代表的な研究を紹介します。

先に、両文化期に大きな隔たりはないという考えを持つ編年を見てみましょう。隔たりはないと考える研究者のうち、代表的なのが安里嗣淳です。安里は、1989（平成元）年に自らの論文の中で「南琉球圏（宮古・八重山諸島）先史時代の編年」を発表しました（安里1989）。この編年は八重山諸島の先史時代のみを対象とし、また、新石器時代を前期・後期と2つに区分している点で他の編年とは大きく異なります（図3）。1993（平成5）年には、同編年に発掘が実施された遺跡の情報を追加し、若干の修正をしました（安里1993）。この編年の中で、与那国島ト

石器の技術段階 時期区分	新石器時代			
	前期	後期		
遺跡の立地	海岸に近い低地石灰岩地帯の赤土台地や、礫層などの赤土台地に多い	海岸に近い砂地に多い		
貝殻や獣骨	比較的少量	貝殻が多量で、貝塚を形成することが多い		
焼石、焼石遺構	不明（焼石を伴う例はあり）	焼石顕著、一部遺跡で大量の遺構		
石器	半磨製・局部磨製が多い 比較的扁平で、小型が多い	半磨製・局部磨製が目立つ 前期に比較して研磨面やや拡大、ていねいな仕上げ、大型化の傾向。 方角片刃石斧まれに伴う		
土器	下田原式土器	無土器		
共伴遺物 (在来品)	スイジガイ突起部加工品、サメ歯製品	スイジガイ突起部加工品、サメ歯製品、貝盤、貝斧（一部遺跡では大量出土）		
時代を示す共伴遺物 (在来品)		玉縁口縁の白磁碗 須恵器 滑石製石鍋 開元通寶（貨銭）		
遺跡の例	与那国島	未発見※	与那国島	トゥグル浜遺跡
	波照間島	下田原貝塚	波照間島	大泊浜貝塚
	西表島	仲間第二貝塚	西表島	仲間第一貝塚 南風見貝塚
	石垣島	大田原遺跡 フーネ遺跡	石垣島	崎枝・赤崎貝塚 名蔵貝塚、神田貝塚
宮古諸島	添道遺跡	宮古島	長間底遺跡 浦底遺跡	

※トゥグル浜遺跡は発掘範囲（約1,500平方メートル）は無土器だが、遺跡の立地は石灰岩台地の赤土上に形成されていて、前期的様相を呈している。

図3 安里嗣淳の編年

ウグル浜遺跡の扱いについては、「前期的様相を呈している」としましたが、2003（平成15）年の論文では、「前期に属する可能性がきわめて強い遺跡」と述べています（安里2003）。この前期・後期という考え方は、下田原式土器の文化と無土器の文化が連続するという考えに基づいています。それを示すように、安里は2004（平成16）年の「八重山諸島波照間島採集の狭刃形石斧」の中で、高宮廣衛の石斧に関する説を紹介した上で、「八重山の石斧文化は前期から後期へ伝統文化として継承されているのであり、断絶はしていない。シャコガイ製貝斧文化だけが、後期に新たにもたらされたのである」と明確に述べています（安里2004）。

もうひとつの考えは、金武正紀らの編年に代表されるものです。金武は1989（平成元）年、沖縄県立博物館が主催した講座で、考古学編年を発表しました（金武1989, 1991）。自らが調査した遺跡の状況を踏まえ、時期を第一期～第五期に区分しています。同編年では有土器→無土器という変遷が明確に記され、また、下田原期・無土器期などの呼称は（ ）で併記されています。その後、この編年は金武正紀・阿利直治・金城亀信の連名で修正され（金武1994）ました。修正では、第一期～第五期という記載がなくなり、下田原期・無土器期・新里村期・中森期・パナリ期といった、土器の型式名や各時期の性格を表した表現に統一しています。同編年と安里の編年と比較すると、3氏の編年が下田原期と無土器期の間不明の時期として空白を設けているのに対し、安里の編年では時間的空白が考慮されていません。

このような編年研究の中で、石垣市史編集課は、「有土器から無土器への変遷については、現況では未だ文化の連続を確定できる資料の出土がないことなどを踏まえ、有土器と無土器との間に空白期を設け、「未発見」と記載」したことなどを説明した上で、金武らの編年をベースにした「石垣市史による編年」（石垣市2007）を発表しています。図1で紹介した編年は、この石垣市史の編年に、白保竿根田原洞穴遺跡の情報を追加しています。なお、編年の右側にある「その他の編年表記」は、ここで紹介した各研究者の編年上での時代区分を示したものです。

## <参考・引用文献一覧>

- 安里嗣淳 1989「南琉球先史文化圏における無土器新石器期の位置」『琉中歴史関係論文集』第二回琉中歴史関係国際学術会議報告 琉中歴史関係国際学術会議実行委員会
- 安里嗣淳 1993「南琉球の原始時代—シャコガイ製貝斧とフィリピン—」『海洋文化論』環中国海の民俗と文化 第1巻 凱風社
- 安里嗣淳 2003「与那国トゥグル浜遺跡の編年的位置の再検討」『沖縄埋文研究』1 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 安里嗣淳 2004「八重山諸島波照間島採集の狭刃形石斧」『沖縄埋文研究』2 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 石垣市 2007「研究史—八重山考古学のあゆみ—」『石垣市史考古ビジュアル版』第1巻 石垣市
- 上原静 1981「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古』第7号 沖縄考古学会
- 大濱永亘 1985「八重山の先史時代を考える」『石垣市史のひろば』第8号 石垣市役所市史編集室
- 大濱永亘 1999「第1章総論 II 八重山考古学研究概史」『八重山の考古学』先島文化研究所
- 金武正紀 1989「考古学から見た宮古・八重山の歴史」第175回博物館文化講座レジュメ 沖縄県立博物館
- 金武正紀 1991「先島の時代区分」『琉球史フォーラム—考古学の時代区分—』名護市史セミナー 名護市教育委員会
- 金武正紀 1994「土器→無土器→土器—八重山考古学編年試案—」『南島考古』第14号 沖縄考古学会
- 國分直一 1972「南島の先史土器とその編年」『南島先史時代の研究』慶友社
- 砂辺和正 2007「宮古の歴史時代—住屋遺跡の発掘調査の成果を中心に—」『先島の考古学』沖縄考古学会2007年度研究発表会資料集 沖縄考古学会
- 高宮廣衛 1981「編年試案の一部修正について」『南島考古』第7号 沖縄考古学会
- 高宮廣衛 1991「八重山の考古学」『沖縄・八重山文化研究会会報』第5号 沖縄・八重山文化研究会
- 高宮廣衛 1992「八重山考古学概史」『陳奇祿院士七秩榮慶論文集』陳奇祿院士七秩榮慶論文集編輯委員会 (台北)
- 高宮廣衛 1994「八重山地方新石器無土器期石斧の推移(予察)」『南島考古』第14号 沖縄考古学会
- 高宮廣衛 1995「八重山型石斧の基礎的研究(3)—磨面に関する若干の観察—」『南島考古』第15号 沖縄考古学会
- 高宮廣衛 1996「南島考古雑録(II)」『沖縄国際大学文学部紀要』社会学科篇第20巻第2号 沖縄国際大学文学部
- 高宮廣衛 2000「南島の先史世界」『日本考古学を見直す』学生社
- 滝口宏 1960「結語」『沖縄八重山』早稲田大学考古学研究室報告第七冊 校倉書房
- 多和田真淳 1956「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧 1956年版』琉球政府文化財保護委員会
- 當眞嗣一 1976「八重山の遺跡とその文化」『八重山文化』第4号 東京・八重山文化研究会
- 西村正衛 1960「八重山の考古学 総合的所見」『沖縄八重山』早稲田大学考古学研究室報告第七冊 校倉書房
- 三島格 1974「外耳をもつ石臼」『奄美文化誌—南島の歴史と民俗』西日本新聞